

# 保全の対策を考える

## 特殊な環境に依存している生きものを保全する

特殊な環境に依存して生きている生きものたちは、環境の変化や外来種の侵入により姿を消すことが少なくありません。また、農村のさまざまな環境の組み合わせがあって生息できる生きものたちも多くいます。これらの生きものたちを保全するには、依存する環境そのものの保全が欠かせません。

### ● 環境の変化に弱い生きものの保全を考える

東北地方や中山間地の農村には、トゲウオやスナヤツメ、カワシンジュガイ、ミズバショウ、ミツガシワなど、冷たい水を必要とする生きものが生息していることがあります。こうした生きものの中には氷河期の生き残りで、水温の上昇に弱く、環境の変化による絶滅のおそれが出ています。そこで、自然再生にあたっては環境の変化に弱いこうした生きものの保全を第一に考えましょう。

これらの生きものを保全するには、湧き水の保全など伝統的な用水の利用形態を復元することと一体的に行うことが必要です。



ミズバショウ



トゲウオ

### ● 隔離が必要な生きものの保全を考える

ため池など外とのつながりのない水辺には、外部から侵入する魚が少ないため、貴重な魚や水生昆虫が生き残っていることがあります。こうした水辺にブルーギル、オオクチバスなどの外来魚を放流したり、国内種でも競争相手となる種を放流したりすると、生き残っていた魚たちは姿を消します。これらの外来種の駆除をすすめるとともに、貴重な生きものたちをこれらの魚から隔離できる環境づくりを考える必要があります。

## 保全・再生への取組み事例

### シナイモツゴの保護と再生

特定非営利活動法人 シナイモツゴ郷の会  
(宮城県 大崎市)

シナイモツゴはため池などの水辺にすむ貴重な生きものの一つで、ブルーギルなどが放流された池はもちろん、競争相手のモツゴが放流された池でも見られなくなっています。シナイモツゴ郷の会では、シナイモツゴを安全・安心のシンボルとし、環境に配慮した農業に取り組む営農組合と連携しながら、生息池の監視やため池における外来魚の駆除などの共同作業を実施しています。さらに誰でもできる在来魚の繁殖技術を確認し、広く普及するとともに、地元小学校での人工繁殖を支援しながら、田園地帯の自然を再生する活動をすすめています。



池干しとバス駆除に参加する子どもたち



植木鉢を産卵床に利用

## ●地域の歴史や文化景観との かかわりの深い生きものを保全する

農村の文化景観は雑木林、水田、畑、集落樹林などの景観構成要素の組み合わせによって成り立っており、これらの組み合わせは農業や生活のあり様によって必然的に決まってきます。多くの生きものはこうした文化景観の中で生きてきました。こうした生きものは地域の文化景観が変化すると姿を消してしまいます。

そこで地域の歴史や文化景観とのかかわりの深い生きものがある地域では、文化景観の保全とあわせて、その生きものの保全を考える必要があります。



サシバ



タチツボスミレ



トウキョウ  
サンショウウオ



ホタルブクロ

## 保全・再生への取組み事例

### オオルリシジミの保全

北御牧のオオルリシジミを守る会  
(長野県 東御市)

長野県の北御牧一帯は古くから御牧原と呼ばれ、馬の産地でした。馬はクララを食べ残しますので、放牧地にはクララが増えます。オオルリシジミはこのクララを餌にするチョウです。

その後、馬は農耕に使われるようになり、舎飼いにされましたが、地域の人たちは秣用の草を土手などから刈るとき、馬が食べないクララは刈残しました。だからクララが豊富な草地は長い間続き、オオルリシジミはその環境で生きてきたのです。オオルリシジミはこのように人と自然のかかわりを象徴する生きものです。

そのようなことから、北御牧のオオルリシジミを守る会では、累代飼育によるチョウの保護と同時に、生息地である水田環境の保全や食草の保護、増殖など農村環境の保全活動も行っています。



小学校理科クラブでの活動



オオルリシジミと  
食草のクララ